けれ

第八に修行の注意を促がして不惜身命の深信を立むむ

問曰段々仰を承るに因果の道明にして六道流轉のれそろしさ語も更に及びがたし此生死艱難の中には教主釋尊ぞ頼なる一代聖教の中には此法華經ぞ勝ける本門壽量の題目こそ本因下種の要法なれ高祖日蓮聖人こそ末法應時の導師あれいかに第六天の魔王の障礙災難をおすとも努々退心あく不惜身命の志を起し自も持力の及ばんほど人をも勧め入しむべしまして此世は假の宿旅寐の夢のほどなれば艱難苦患をも厭はす五塵(色○聲○香○味○觸○)六欲(眼○耳○鼻○舌○身○

意)とも顧ず若は悪智識ありて此題目を捨よ金銀を與ん他經を信ぜよ高貴の位を推べしといふとも少も貪る意おく縱頸をば鋸にてひきゝりどうをばひしほこを以てつゝき足にはほだしを打きりを以てもむとも命のかよはんきは丶南無妙法蓮華經と唱てとおへ死に死て未來成佛の大樂を期せんと存じつるはいかん

答曰其志だに强盛あればおにか未來成佛の疑あるべけんや努々怠り玉ふべからず儒教にも兵食なほすつべし信はすつべからず仁者は勇を好む身を殺しても仁をひろむるよしたとひ太刀劒を以て切さいなむとも食をほして身命に及ぶとも信を守りて

仁を行ふべしとをもふすことなり況や後生を願ふ身として
いかんぞ現世の欲を貪り身命を惜んや過去遠々却よりの
十惡五逆謗法等の罪深ければ信心弱しては臨終の時阿鼻
(無間地獄)の相現るべし其時此題目をならうみ玉ひそ假令
臨終の時前々の罪によりて地獄の先相あらはるゝとも此
時に強盛の信心を起し一心に南無妙法蓮華經と稱ひなば
地獄の炎も忽に滅し寂光の淨土と變ぜんこと疑ひあるべ
からず臨終の一大事と申は此事ありたとへ前々に少しの
信心ありとも一息斷絶の砌に至て元品の無明たる惡智識
の勸により念佛眞言等の小善に移りて此題目の大善を捨

ならば捨大取小の罪にひかれて忽に地獄にや隨べけんむ
かし四禪比丘と聞へしは第四靜慮の證(色界第四禪天の悟)
も得玉ひしかども臨終に一念謗法の意を起せしかば四禪
の陰相(五陰の相也天界人界乃至地獄皆五陰和合して衆生
とあるうせて無間の陰相あらはれ忽に地獄に墮玉へぬ又
阿闍世王は父を殺し母を殺さんと苦め玉ひし逆罪により
て臨命終の時阿鼻地獄の相を現ずれども最後の一念に強
盛の信心を發し敬主釋尊を賴奉り法華經を信じて不孝の
罪を懺悔し謗罪消滅を祈玉ひしかば地獄の炎を滅するの
みならず結句は逆罪謗罪の二罪を消滅し壽命をのべ終に

決定の信者とおり如來幷に迦葉。阿難。の大檀那となせ玉へしゞかし(闍王の父を殺す等の大罪人最後の一念に懺悔心を生じ忽逆謗の二罪を消滅せしと聞て末代の我等も亦縱ひ生前殺。盗。をおすとも臨終に懺悔せゞ皆消滅すとおもふて惡事をなすなかれ彼は佛在世是は末代彼は宿善厚く是は宿善拙なし彼時には影響衆あるべし今時い結緣衆多かるべし況て闍王の懺悔のごときい尋常のことにあらず無二強盛の信心を起せしあるべし請斷滅の見を起して汝の惠命を妖傷し己が法身を亡失することなかれ)かくまで最後臨終の一念は大切あれゞ平生より心懸不惜身命の信

心を勵み給ふべし高祖聖人も臨終のことを先に習ひて後よ他事を習ふべしと仰せられたれゞ返すゞゝも唯今の語をゞ今身より佛身に至まで違へおく寐ても覺ても題目の修行退轉あるべからず嬉しきかあや惡世末代の三毒強盛の身として斯まで信じ玉ふことの不思議さよ予淺智短才の愚なる口よりあとさきも調はず俗談鄙言のかたはらいたき物語を喇弄こそあるべけれ却て強盛の信心を發し玉ふ事宿世善根の餘慶なるか佛天善神の御はからひにやあまりにうれしくも又尊とけれゞそのあらましを拙筆に書しるしけり

明治二十年十二月廿六日御屆
同　二十一年一月　出版

（定價金二錢）

編輯兼出版人　新潟縣平民　宮嶋慶明
東京赤坂青山北町四丁目七十一番地

發行所　東京本郷本妙寺中　教勵會
東京本郷區菊阪町八十二番地

印刷所　秀英舍
東京日橋西紺屋町二十六七番地

明治三三、三、一九記入

020102-000-5

特21-973

法の道しるべ

日修／著

M19-21

ABH-0304